

キリスト教の視座から

月本 昭 男

宗教改革者M・ルターが「信仰によりてのみ」(sola fide)を標語にしたことはあまりにも有名であるが、その「信仰」自体は二千年にわたるキリスト教の歴史のなかで多様な展開をみせてきた。したがってキリスト教においては、他の歴史宗教においてもそうであるように、信仰者の信仰のあり方も、信じられる対象の理解も時代と地域によって、また教派によって大きく異なる。そこに共通性があるとすれば、そのつど聖書に拠って新たな「信仰」を造形してきたということであろう。経典宗教としてのキリスト教の特質がそこにある。本発題では、聖書における「信仰」、なかでも発題者が研究対象とする旧約聖書の「信仰」をとりあげ、キリスト教信仰の淵源に触れてみたい。

周知のように、キリスト教はユダヤ教の経典をそのまま受容し、これを後に成立する新約聖書と区別して旧約聖書と呼んだ。十字

架上に処刑されたイエスをメシア(＝キリスト)と信じるキリスト教信仰は、当初、旧約聖書によって基礎づけられたのである。キリスト教徒にとってイエスの苦難の生涯と「復活」とは旧約聖書の成就にほかならなかった。さらに、イエスを「神の子キリスト」と信じ、その死に贖罪の業をみる信仰も、あるいはパウロの「信仰義認」の教説も、旧約聖書にその典拠が求められたのである。このようなキリスト教の根本教義は民族信仰を基礎に据える旧約聖書を中心主題ではなかったが、キリスト教はその自己理解の根幹を旧約聖書に探り当てた。そのことによって、旧約聖書に展開する神信仰のあり方自体をもキリスト教は継承したのである。

一

キリスト教(とりわけプロテスタント諸教派)が「信仰による

救済」をその教説の中心に据える根拠は新約聖書である。なかでも「ガラテア人への手紙」や「ローマ人への手紙」においてパウロの論じる「信仰義認論」が重視されるが、パウロ書簡以外にも「信じる」ことと「救い」を結びつける言葉は新約聖書に繰り返しあらわれる（以下の聖書箇所引用は原則として日本聖書協会『新共同訳聖書』による。但し、旧約聖書の神名は「主」ではなく「ヤハウェ」とした）。

人は律法の実行ではなく、ただイエス・キリストへの信仰によって義とされると知って、わたしたちもキリスト・イエスを信じました（ガラテア書二章16節）。

ところが今や、律法とは関係なく、しかも律法と預言者によって立証されて、神の義が示されました。すなわち、イエス・キリストを信じることにより、信じる者すべてに与えられる神の義です。そこには何の差別もありません（ローマ書三章21-22節）。

神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子をお遣わされた者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである（ヨハネ福音書三章16節）。

信じて洗礼を受ける者は救われる（マルコ福音書一六章16節）。主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたも家族も救われます（使徒言行録一六章31節）。

これら新約聖書の用例において「信仰」と訳されるギリシャ語

はピステイス、「信じる」はピステウオーである。これらの用語は、「信頼に足る」という意味の形容詞ピストス、それに否定辞を伴わせたアピストスなどと共に、すでに古典期のギリシャ文献にも用いられているが、それらの用法は主として誓約や約束などの社会的場面を前提にしており、神に対する人間の関わりを表す術語とはならなかった（それはギリシャにおいてモイラ「運命」が人間のみなならず、神々をも支配すると観念されていたことと無関係ではないであろう）。ピステイス、ピステウオーさらにその関連語が宗教信仰に関わる術語としてひろく用いられるのはヘレニズム期以降である。その契機となったのは、前三世紀から二世紀にかけて、エジプトのアレクサンドリアに住むユダヤ人の間でヘブライ語からギリシャ語に翻訳されたといわれる七十人訳聖書であった。新約聖書に引用される旧約聖書の諸箇所はおおむねこの七十人訳聖書によっている。この七十人訳聖書がヘブライ語聖書に類出する名詞エメト／エムナー（エメトとエムナーはほぼ同義、「真実」「誠実」と訳される）に主としてピステイスを、動詞のヘーミーンに主としてピステウオーを充てたのである。これらのヘブライ語は、後にキリスト教の祈りや讚美に際して用いられるアーメンとともに、同じ語根（*ymn*）から派生している。

二

では、これらのヘブライ語はどのような神と人間との関係を表

すのか。その前提として、旧約聖書における神信仰を示す他の表現を概観しておきたい。旧約聖書における神信仰を表す表現は少なくないが、概して、そこには古代西アジアの神信仰との共通性が認められよう。

神を「畏れる」(ヤレー)という表現がそのひとつである。

箴言一章7節などでは「ヤハウェを畏れることは知恵のはじめ」と記され、信仰者は「ヤハウェを畏れる人」と呼ばれている(現行邦訳聖書がヤハウェを「主」と訳すのは、七十人訳聖書が古代イスラエルの神名ヤハウェにキュリオス「主」を充てた伝統による)。これを畏怖としての信仰と呼ぶとすれば、それは、言語的にも宗教文化的にも旧約聖書の背景をなす古代メソポタミアにおいて、すでに古くから一般化しており、神信仰は神ないし神々への「畏れ」(アッカド語 *pulu*, 動詞は *palanu*) と表現されていた。したがって、神信仰を畏怖として表現することは神信仰のヘブライ的特質というよりは、古代西アジアに共通するのであり、R・オットーが『聖なるもの』で分析したように、人間の根源的宗教経験に由来するのであろう。キリスト教もこの「畏怖としての神信仰」を継承したが、これを神学概念化することはなかったようにみえる。

旧約聖書には、「畏怖としての信仰」以外にも、古代メソポタミアの宗教観念に遡る神信仰表現が少なくとも三つ指摘できる。

その一つは「神に仕える」という表現である。ここでは、神と

人間との関係が主従の関係として捉えられ、祭儀をもって神を祀ることが、「僕」としての人間の義務と理解される。古代メソポタミアの楔形文書に残る複数の人間創造神話によれば、人間は、神々の世界で下級神が行っていた上級神への労働奉仕を肩代わりさせるために、粘土と殺された神の血をもって創造されたのである。つまり、神々に「仕える」ことが人間の本来のつとめであった。そのような神話自体は旧約聖書に受容されることはなかったが、神ヤハウェはヘブライ語で「主人(アドーナイ)」とも呼ばれ、礼拝行為は「ヤハウェに／神に仕える」と表現された。そのような語法はキリスト教にも引き継がれ、周知のように、神を「主」と呼ぶ習慣が一般化した。そして、英語の *service* やドイツ語の *Gottesdienst* などにみられるように、礼拝は「奉仕」と理解された。しかし、キリスト教においては総じて、神と人との関係を主従関係と捉える発想そのものは希薄化した。その最大の理由は、キリスト教において、信徒は神の「僕」ではなく、「神の子」とされる、と信じられたからであろう。

二つ目は神を「尋ね求める」(ヘブライ語 *biššaq* シュ、ダールシユ、シャーアル他) という表現である。元来、「尋ね求める」対象が具体的に神の「憐れみ」であったり、神の「好意」や「救いの業」であったりしたが、「神を尋ね求める」という表現はメソポタミアにおいてもイスラエルにおいても、次第に、祈りや讚美をもって「神を敬う」ことを意味するようになる。そのような

代表例として申命記四章29節（「あなたたちはそのところでヤハウエを尋ね求めなければならぬ。心を尽くし、魂を尽くして求めるならば、あなたは神に出会うであろう」）をあげることができ。しかし、イエス・キリストにより人類の救いが原理的に実現した、と信じるキリスト教においては、この「神を尋ね求め」という信仰態度もまた後退したといつてよい。

三つ目は神が「愛する」もしくは神を「愛する」という表現である。「愛する」と訳される動詞（ヘブライ語アハブ、アッカド語ラーム）は、元来、親子や男女の間の親密な関係を表すが、古代西アジアでは古くからそれが特定の人間に対する神の好意を表す動詞にしばしば転用された（「知る」という動詞の場合にもこれに似たことが言いうるが、今回の発題では省略させていただく）。しかし、この「愛する」という動詞が神と人との間の関係概念として術語化されたのは、私の知る限り、旧約聖書が最初であった。たとえば、イスラエルの先祖がエジプトでの奴隷状態から解放されたと伝える民族伝承は、ヤハウエ信仰の原点として伝えられてゆくが、この出エジプトはヤハウエがこの弱小の民を「愛した」しるしとして次のように理解されている。

あなたは、あなたの神、ヤハウエの聖なる民である。……ヤハウエが心引かれてあなたたちを選ばれたのは、あなたたちが他のどの民よりも数が多かったからではない。あなたたちは他のどの民よりも貧弱であった。ただ、あなたたちに対す

るヤハウエの愛のゆえに、ヤハウエは力ある御手をもってあなたたちを導き出し、エジプトの王ファラオが支配する奴隷の家から救い出されたのである（申命記七章6～8節）。

こうして、イスラエルに対する神ヤハウエの「愛」はいわゆる選民思想の根拠とされた。それゆえ、イスラエルの民もまた神ヤハウエに「愛」をもって応えなければならぬ。とくに申命記は神ヤハウエを「愛する」ことをこの民に繰り返し要請する。神ヤハウエへの「愛」はたとえは申命記六章4～5節に次のように定式化され、今日なおユダヤ教徒が最も大切にしているシエマの祈りとなった。

聞け、イスラエル、われらの神ヤハウエは唯一、あなたは心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くして、あなたの神ヤハウエを愛しなさい。

ここにおいて、「愛」を媒介とする神ヤハウエとイスラエルの民との排他的相互関係が明確に言説化されたといつてよい。ここでいわれる「あなたの神、ヤハウエを愛しなさい」とは、具体的には、モーセを介して授けられた神ヤハウエの律法を遵守せよ、という意味である。そして、その律法中の社会法部分には社会的弱者（孤児と寡婦、寄留の外国人、貧しい者たち）に対する配慮ある行為が定められていたがゆえに、「愛」として概念化された神と民の相互関係にいわゆる「隣人愛」が組み込まれることとなるが、初期ユダヤ教においてそれは同胞愛として理解されていた。

それに対して、この隣人愛の教説を同胞愛から解き放つて、普遍化しようとしたのがイエスの運動であり、そこからキリスト教における「愛」の教説が展開したことはいうまでもない。

三

以上のことを踏まえた上で、最後に、七十人訳旧約聖書がビステイス「信仰」およびビステウオー「信じる」という訳語を充てたエメト／エムナーおよびヘーミーンの問題に触れてみたい。

はじめに述べたように、新約聖書において一般に「信仰」と訳されるギリシャ語はビステイスである。ところが、七十人訳聖書がこのビステイスを充てたヘブライ語エメト／エムナーはふつう「真実」「誠実」などと訳される語であって、一般に理解される「信仰」という意味ではなかった。事実、エメト／エムナーは通常「信仰」と訳されることはない。唯一の例外はハバクク書第二章4節であり、邦訳聖書の多くはこのことを「義人は彼の信仰（エムナー）によって生きる」と訳している。しかし、この箇所ではエムナーが「信仰」と訳されるのは、M・ルター以来のパウロ神学の理解を前提にするからである。旧約聖書の脈絡でみれば、「義人は彼の真実によって生きる」と訳すべきである。ちなみに、七十人訳聖書はこれを「義人は私のビステスによって生きる」と訳している。この場合、「私の」とは「神ヤハウエの」という意味であるから、このビステスは人間の側の「信仰」ではなく、神

の「真実」という意味でなければならない。パウロはこの箇所を引用するが、そこではなぜか「彼の」も「私の」も欠落している（ローマ人への手紙一章17節、ガラテア人への手紙三章11節）。いづれにせよ、元来、エメト／エムナーという単語は「確かさ」を表す語根 (*em*) に由来する。それゆえ、ヘブライ語聖書において一七〇を数えるこれらの単語の用例中、「神のエメト／エムナー」という表現も少なくなく、その意味は「神の真実」であって、「神への信仰」ではない。それが「真実」と訳されるのはその主体的側面に焦点が当たっているからであり、その客体的側面に焦点を当てれば「真理」ということになるだろう。事実、エメト／エムナーに七十人訳聖書はビステイスの他にアレーテイア「真理、真実」を数多く充てている。

この語の動詞形であるヘーミーンの場合も同様である。それはある対象を「確かなものと受け止める」という意味であり、用例は少ないとしても、この動詞は神を主語にとる場合さえあり得る（ヨブ記四章18節他）。したがって、旧約聖書においては、後のキリスト教でいわれる「非合理ゆえに我信ず（credo quia absurdum）」あるいは「知らんがために我信ず（credo ut intelligam）」といった信仰態度はありえない。むしろ、神ヤハウエの約束や教えや律法が、すなわち神ヤハウエ自身が、エメト／エムナー「真実」である、と認めることがすなわちヘーミーン「信じる」という態度であった。また、そう「信じる」がゆ

えに、イスラエルの民もまたエメト／エムーナー「真実」であらねばならない。そこに、すでに「愛」においても確認した、神と人との人格性を帯びた相互関係が生じるのであり、それが旧約聖書における神信仰のきわめて重要な特質をなすといつてよい。旧約聖書がイスラエルの民の歴史伝承にこだわる理由も、そこに神ヤハウェの「真実」を見きわめようとする心性が強くはたらいっているからである。

四

キリスト教は旧約聖書の神信仰のすべてを継承したわけではなかったが、新約聖書でパウロがビステイスをことさら強調するとき、旧約聖書におけるエメト／エムーナーがふまえられていることは間違いないであろう。そこで問題になるのは、パウロにおける、そしてとくにルター以来のプロテスタント諸教派がその中心教説として掲げた、いわゆる信仰義認論である。この教説の根拠とされた代表的な箇所が一に引用したパウロの言葉である。これらの箇所で「イエス・キリストへの信仰によつて」（ガラテア書二章16節）や「イエス・キリストを信じることにより」（ローマ書三章22節）と訳されるギリシャ語の原文はいずれも同一表現である（*diá pisteōs Iesou Christou*）。ごくふつうに読めば、この表現にみる「イエス・キリストの」という属格形は主格支配とみられるから、「イエス・キリストのビステスによつて」と理解

されるだろう。ところが、現行邦訳聖書の多くはこの属格形を対格支配と理解して「イエス・キリストに対する信仰によつて」と訳している。このような理解を最初に明示したのは、じつは、「信仰のみ」を標榜したM・ルターであった。それによつて信仰義認論が根拠づけられ、人間の側の「信仰」という行為もしくは姿勢が救済に至る前提とされてきたのである。しかし、それまでのラテン語訳においてこの属格形は主格支配と理解され、「イエス・キリストのフィデスによつて（*per fidem Iesu Christi*）」と訳されていた。

パウロのいうビステイス・イエス・クリストゥーは「イエス・キリストの真実」なのか、それとも「イエス・キリストに対する信仰」なのか。発題者はギリシャ語文法の専門家でも新約聖書学の専門でもないで、この問題の最終的な結論を述べることが控えるが、この背後に旧約聖書においてエメト／エムーナーの観念（「神ヤハウェの真実」）があるとすれば、そして回心前には熱心なユダヤ教徒であったパウロが旧約聖書に通じていたことを思えば、「イエス・キリストの真実」という訳のほうが正しいようにみえる。また、この問題を扱った比較的最近の研究論文を瞥見する限り、これを主格支配の属格形と解する見解のほうが優勢であるといつてよい（邦訳文献では、太田修司「パウロ的「信」の構造」『新約学研究』二四号、一九九六、高市和久「パウロにおける信仰と義認」『日本の聖書学』七号、二〇〇二年など）。

パウロのいうピステイス・イエス・クリストウは「イエス・キリストの真実」なのか、それとも「イエス・キリストに対する信仰」なのか。ことは翻訳技術上の問題にとどまらない。人間の側の「信仰」は救済の絶対条件なのかどうか、という神学上の問題であり、歴史的には、ユダヤ教が前提にする民族という枠を打破して世界宗教として発展したキリスト教の信仰理解の原点でもある。比較思想という観点に立てば、仏教の「悟り」と対比的に論じられるキリスト教の「信」の内実に関わるだろう。

(つぎもと・あきお、古代イスラエル宗教史、立教大学教授)